

書 評

清水孝治 著

『近代美濃の地域形成』

古今書院 2013年4月 212頁 7,000円＋税

本書は、著者・清水孝治氏が明治大学に提出した博士論文を基本としてまとめられたものである。

これは、近代日本の地方空間に位置する美濃地域の歴史の変容過程を追い、その近代期の地域形成過程を具体的実証的に跡付け、それをもたらした主体やその機能、地域形成メカニズム等の解明を試みた歴史地理学的研究と言えよう。

本書で最も注目されているのは、地域形成過程における「地域的主体」の積極的な役割とその結果としての新たな地域の形成である。すなわちそれは、「地域」や「地域性」が、自然環境や前時代からの軀ともいえる伝統的な地域文化によって常に制約された静態的な存在ではなく、また近代の国家意思や時代の構造の下で専ら従属的に生産される存在でもなく、むしろ地域に内在する人間やその集合体といった能動的主体的な存在（地域的主体）の意思やその諸実践が強く作用した結果、形成される動態的な存在であるとする見方である。

ここでは近代において「形成される」地域をとりわけ経済的な側面から捉えており、地域形成に関わる主体として地域の経済的有力者層（地方資産家・企業家：商工業者や地主名望家）を想定し、彼らの動向に注目している。また、地域に急激で大きな変化をもたらす重大な契機となる事象として、中央線や東海道線という幹線鉄道の開通とそれに伴う輸送網の変化が指摘されている。鉄道開通は実際に諸々の地域間関係を変え、それによって各地域の盛衰や勢力圏の変化がもたらされた。それに対応するべく、地域的主体が地域振興の構想を打ち出し、地域内外と連携して振興策等を実践した結果、地域的特質や他地域との関係が大きく変化し、新たな地域形成が行われたことが、本書では跡付けられ示されている。このようにして、明治初頭には前近代的な特徴を有していた地域が、近代的な地域へと再編成されてゆく。

ここで、本書の構成を以下に示し、各章の内容

を紹介しておこう。

第1章 課題と方法

第2章 美濃地域南東部・可児郡における地域再編

第3章 可児郡における鉄道交通導入による地域形成

第4章 美濃地域西部・大垣における地域再編

第5章 大垣における地域産業振興による地域形成

第6章 総括と展望—近代美濃の地域形成—

第1章では、まず「地域の側からの近代日本の問い直し」が、歴史地理学や関連分野の中で進んできたことが示されている。実際、中央集権型国民国家による統合過程の中であって、近代日本は実は地域的な多様性や異質性を保持してきた。それを解明するためには、地域の側から仔細に地域の事実を観察し地域像を描き出す試みが不可欠であろう。そして、近代日本の地域形成と相互的な関係を有する存在としての「地域的主体」の重要性が指摘され、彼らの認識や動向を軸に本論部分で事例地域の地域形成過程を検証することが示された。また、本書のキーワードともいべき「地域再編・創造、地域形成」「地域的主体としての地方資産家・企業家」「近代交通史研究」に関わる研究史の整理が行われた。

第2章以降の地域事例検証では、主として経済的な地域変容を跡付けており、とりわけ鉄道交通の出現の強い影響を指摘している。そして、地域の産業化・近代化に対する地域的主体の振る舞いにも大きな注目を向けている。

岐阜県内旧美濃国の中で、筆者は二つの地域、可児郡と大垣（旧・安八郡）を研究対象地域とした。美濃国のうち前者は東濃（あるいは中濃？）地域に属し、後者は西濃地域に属する。前者は、とくにその北部が、木曾川の河川交通と中山道という主要街道に恵まれて近世以来の重要な結節点として地位を得てきた地域である。一方後者は、近世において美濃地域の中でも最大の政治経済的中心地であった場所である。この2地域の近代期の地域形成過程について、第2・3章では前者、第4・5章では後者をそれぞれ取り上げ、基本的

に同様の段取りで検討を進めている。

第2・3章の内容は次のとおりである。

まず第2章で、著者は可児郡、とくにその元来の中心である北部地域について、陸路と水路に恵まれたことによる結節性と中心性の確保、産業面では稲作・養蚕地域からその後の製糸業の発展、そして明治後期の中央線開通に伴う輸送網の変化と地域再編と変化する地域事情について述べた。

続く第3章では、輸送網の変化による地元地域の中心性や既存産業の衰退の克服を「地域的課題」と認識した郡北部の地域的主体が、民営鉄道の導入を推進して地域を再創造する過程が描かれる。ここで、それに取り組んだ地域的主体を「東濃鉄道の建設推進者」として特定し、彼らの鉄道建設への関わり方と、さらにそのうちの幾人かについては具体的に名前を挙げて、地域振興活動への取り組みを示した。彼らの大半は沿線地域に居住しており、家業の維持・発展だけでなく、可児郡という地元地域の経済振興を強く意識して、他の資産家らと協同もしながら、地域の政治経済の振興に寄与しようとしていたことが強調された。

清水の分析はさらに大正期の東濃鉄道開業後の地域創造・再編にも及んでいる。まず、鉄道事業の堅調な展開、それに連動した地域的主体の参画による会社企業の増加等の地域経済の発展、郡北部地域の中心性の維持等が確認された。しかし、大正後期に状況はさらに変化する。地域金融・電力・鉄道事業への域外資本の進出や政府による鉄道拡充政策により、可児郡はより大きな上位の地域空間である中京経済圏に包摂されていく。これも新たな地域の創出＝地域形成である。

第4・5章では、大垣について可児郡同様の検討が進められている。

第4章では、近世以来、城下町（政治的中心）として、また揖斐川水運と緊密に結びついた商業都市として発展し、高次の中心性・結節性を誇った大垣の近代以降の変容が論じられている。明治国家による統合・再編過程の中で、大垣は広域の政治的機能を失う一方で経済的機能を維持し、商業都市として存続した。その原動力は旧藩士族と商工業者であり、旧士族は国立銀行の設立に寄与し、地元商工業者は、彼らが集い地元地域の現状や課題について議論し、その改善を図ろうとする地域経済団体（商況会話所、大垣商工会、大垣商

業会議所）を自主的に組織した。その後、東海道線の開通（1884年）が舟運依存の輸送網を変えて、大垣の交通上の優位性を奪い、同時に大垣と岐阜との経済的競合関係を顕在化させ、引いては大垣の劣位を浮き彫りにした。大垣の商工業者には、この格差の現実と同時に、大垣の地域産業の伸び悩みの事実が強く意識させられた。

本論部分では最終に当る第5章では、地域産業の伸び悩み状況を打開すべく、地元の地域的主体により取り組まれた外来型工業化による地域産業振興の動向とそれに伴う工業都市・大垣の形成が説明される。

東海道線開通に起因する輸送網の変化は、大垣の強みであった商業とくに卸売機能の停滞衰退をもたらした。また明治前期より地元商工業者等が主産業として導入定着を図った養蚕・器械製糸業・綿糸製造業が結局何れも根付かず、大垣の工業化は進展しなかった。こうした地域的危機を前に、地域的主体が一体的に取り組んだのが、外来型工業化であった。

清水は商工業の停滞という地域問題とその要因を地元商人・実業者がどのように認識してきたのかを、大垣実業協会という地域経済団体での議論を基に再現し、新たな工業化が企図されるまでの過程を示した。続いて地域的主体（個々の地元商人・実業家や地域経済団体）による工業化への取り組みの過程が示された。結局、内発型工業化の挫折による外来的工業化への転換が、地域振興の最終手段として打ち出され、地域内外の諸主体（地元商人・実業家・経済団体と東京・大阪在住の大垣出身実業家やその関係者）がどのように関わり合い、挫折を経ながら、大垣への外来型近代産業（電力、紡績・繊維、電気化学等）の立地・誘致に至り得たかが、具体的かつ詳細に説明された。外来的近代工業化の結果、大垣は新たな都市発展を経験し、従来の商業都市とは異なる性格の地域「工業都市」として再興・再形成された。

第6章は本書の結論部分であり、第2～5章の内容が再びまとめられた後、既往研究の中に本書の知見を位置付けながら、残された研究課題が示されている。

内容紹介が些か長引いた。以下は、全体を通して気付いたことをランダムに記しておく。

まず、本書によって発見・確認された歴史地理

学的に価値ある事実や成果を挙げておきたい。

本書のキーワードと言い得る「地域的主体」を概念規定し、その地域形成において果たす能動的積極的役割を予め想定し、実証的にそれを確認したことが、本書の重要な成果の一つであると、評者は考える。言い換えれば、地域的主体の現状認識やそれに基づく地域構想や地域的行動が、地域形成の在り方を強く規定するということである。ただし、近代の進展につれて、地域の運命は地域的主体（域内の担い手）の対応のみによっては決さず、国家政策や域外の資本・権力の進出や介入の影響を受けた新しい地域が、地域的主体の当初の思惑とは異なる姿となって現れることも確認された。さらに、地域商工業者等が組織した地域経済団体を、能動的に行為する地域的主体概念の中に含めたことも、適切であった。

鉄道の開通に伴う輸送網の変化が、内外の地域間勢力関係を大きく左右し、新たな地域形成を惹起するきっかけとなることも、目新しくはないが、本書で改めて実証的に確認された歴史地理学的事実である。

大正期にそれぞれ異なる形ではあるものの、可児郡でも大垣でも外部資本の進出が見られた。東京・大阪・名古屋といったより上位の都市の勢力が地方に進出し、地方空間がそれら大都市の影響圏の中にこの時期に包摂され始めたことがわかったことも、貴重な成果である。

大垣の新しい外来的工業化に関わる部分（第5章）では、大都市の同郷ネットワークの重要性にも気付かされた。すなわち、大垣出身で東京・大阪在住の財界人等が、一種の故郷への還元として、地元での新事業の起業のために交渉や資金調達に関わったり、新会社設立後に経営に参画したりすることで、地元の地域形成に寄与しようとしていることの重要性である。新興近代工業都市・大垣は、こうした同郷者の存在と援助を介した地域内外の連携を以て、初めて誕生したといえよう。

一方、少し気になった点を次に指摘してみたい。著者が最初に強調した「地域の側から」のアプローチの必要性に、評者も異論はない。しかし、有力な地域形成者としての「地域的主体」に注目するならば、彼らが何故地域の維持・発展に関わっていったのかという問題を考える上で、当人たちの出身階層や家業・その他の政治経済的活

動の実績を詳しく示すだけではなく、彼らの地域（経済）に対する認識や思想、その振興に対する積極的な意向等を彼らの「肉声」から跡付けるという方法もあり得たのではないだろうか。

例えば、大垣という「地域」を意識しつつ地域産業の発展を憂慮したことが経済団体の結成に結びついたとする著者の理解は間違っていないと思われるが、それを裏付ける地域的主体の実践や言説をできればもう少し取り上げてほしかった。

また、地域的主体が地域振興に乗り出した「動機」と「論理」に関しては、恐らく著者が文中に記した推定に大きな誤りはないように思われる。しかし、彼らが実際に何をどう考えどう判断したのかという具体的な思考・行動過程については、できるだけ証拠を集めて例証すべきではないか。また、地域的主体が、地域（経済）の現状やそれに関する外部からの評価に関わる情報を、如何にしてどの程度まで得ていたのかという点も、地域的主体の行動を理解する上では、より追究されるべきではないか。

地域形成に関わる事象が生じるとき、そこには地域的主体の中でもさらにキーパーソンとなるような人物がいるものである。多額の資産を有している名望家層や、中でも積極的に経営や政治に取り組む者などがそれに当る。彼らの個人誌biographyに迫ることも、研究を深める上で有効な方法ではないかと考えられる。

このように地域や地域的主体を我々が理解するためには、それに適う公的・私的文書や資料が必要となろう。本書の中でも、そうした同時代の文書資料（例えば「大垣商況会話所設立二付御聞置書」（103頁）、「大垣商工時報」（133頁）、「大垣実業協会趣意書」（140頁）や「同協会通常会討議」記録（141頁））が有効に用いられているが、さらに、個人の日記や地方新聞等に注目し、そこに記された同時代的な地域の現状認識や将来展望に関する記事や言説を収集分析することができれば、当時の地域事情の解明により一層資するものと思われる。著者の史資料渉猟および分析の作業の労は多大であったと推測されるし、実際に適切な史資料が存在するかどうかは不明であるが、可能であれば今後試みてもらいたい。なお、近代新聞はある地域を外部がどのようにみていたのかを知る上でも貴重な資料であり、本書のような研究にも

それは活用できるのではなからうか。

本書第5章は、地域的主体の構成や役割に本書の中で最も詳しく言及した部分である。特に個別の商工業者や名望家のみならず彼らが組織する地域経済団体（商況会話所、商工会、商業会議所）も地域的主体のカテゴリーに含め、それらの地域振興に向けた活動や地域形成に果たした役割を詳しく検討した点は、貴重な視点である。

ところで、この地域的主体概念には、当時の地方公権力すなわち市長・郡長・町長や議会が含まれないのであろうか。こうした政治権力は地元地域の発展衰退に無関心なわけでは無からうし、例えば内在的工業化が行き詰まった後に地元商工業で醸成された新たな地域振興策としての外来的工業化が、町議会において、どのように論じられたのか、また町が振興策にどのように関わったのかといったことは、参照しておくべきポイントではないだろうか。実際、昔も今も、地方の政界と財界との間には人士の重なりや繋がりがあり、とりわけ地域振興に関しては双方が一体化して行動する機会も多い。したがって、二つの事例地域研究においても、地域形成を方向付ける公権力主体としての町長や議会の地域的課題に対する認識・対応等に言及がなされるべきではなかったか。それによって、地域形成・再編等の進展過程がより多面的に動的に説明されるように思われる。

また、それに関連して、可児郡や大垣の動向に関わる外部公権力の認識や対応、すなわち岐阜県政が可児郡や大垣の地域的動向をどのようにみていかなる対応を与えたのかという点についても、著者に問いたいところである。県庁都市の岐阜への県政の対応と、大垣や可児郡への県政の対応を比較することから判ることもあるかも知れない。

最後に、本書が近代歴史地理学研究あるいは近代日本の地域形成研究の中で、どのように位置づけられるのかという点について考えたい。この問題を考えるとき、同書が地域に関する詳細な資料調査等により、歴史的な地域形成過程を地域の側に立って丹念に描き出したことは、当該分野における重要な成果として評価できよう。また、地域的主体という概念を明確に打ち出し、その実態や

それが地域形成において果たした積極的な役割を描き出したことも同様である。この他にも、極めて興味深い事例の指摘が本書にはある。

しかし一方、事例地域での研究から得られた知見を通じて「近代日本の地域形成」の何がどこまでわかったのかという問いに対しては、著者は十分に答えきれていないようにも見える。何が足りないのかと考えると、本書がやはり美濃という極めて限定された地域での実証研究であったことが一つの原因と考えられる。しかしこれは、地域に深く入り込んだ詳細な研究を、著者が優先して遂行した結果であるともいえる。幾多の時期・地域での検証的研究を今後積み重ねてゆき、本書も含めたそれらを比較考察することが、一つの考えられる研究の方向性であろうか。

ただ、それは正に今後の課題であり、本書の中で取り組もうとしても難しい課題である。むしろ、本書の中で著者が近代歴史地理学研究としての本研究の到達点と意義、位置付けをもう少し明瞭に整理して示すことが必要ではなかったか。要するに、それは本研究から得られたいくつかの知見の整理作業とその結果の解りやすい提示である。

例えば、この事例研究が近代日本のどのようなタイプの地域を対象とした研究であったのか、あるいは地域的主体の地域形成過程への関与の仕方や主体・環境・構造などが関連し合った地域形成のメカニズムとはどのようなものであり、それは対象地域の歴史性・地域性と如何に関わっていたのかといった問いへの、モデル図式なども織り交ぜた判り易い回答があれば、著者の持つ大きな近代日本歴史地理学研究の枠組の中で、本書がどのような意義を有する営為であったのかということが、より一層理解し易いものになったのではないかと思われる。

さて、第6章の末尾を読むと、著者は今後とも近代日本の地域形成（再編・創造）過程を「地域の側から」描き出す研究に取り組むようだ。近代日本の歴史地理学の発展のために、若き著者の今後一層の研究の進展を期待したい。

（山根 拓）